

エジプト18王朝

ハトシェプストのせいでファラオになることができなかったが、彼女の死後やっと順番が・・・。ハトシェプストを恨み、彼女の彫像や名前を破壊。政策も徹底的に否定した。軍事遠征を活発に行い、パレスチナ方面に遠征。反抗していた国々を屈服させる。領土拡大により「エジプトのナポレオン」と呼ばれる。



トトメス3世墓は不思議な線描画で装飾されている

スフィンクスを掘り出した人。王子だったトトメス4世の夢の中にスフィンクスが出てきて、砂から掘り出してくれたら王にしようと云ったとのこと。この夢のことを書いた「夢の碑文」がスフィンクスの前に建っている

多神教のエジプトでは、次々にアメン神官の力が強まり、王権を脅かすように。そこでアメンホテプ3世はアテン神を唯一絶対の神とした。(アメン神官の力をそぐため) さらにアマルナに遷都。アメン神に対する否定を行った。名前も「アクエンアテン」と改名。この時代、新しい時代に合わせ、自由な芸術が花開き、「アマルナ芸術」と呼ばれる優美で自然主義の芸術が栄えた。王の彫像も、王の特徴をそのまま表現。長すぎる顔や出たお腹など、他の王の彫像とは全く違う。題材も家族のむつまじい姿などが温まるようなものが多い。しかし晩年は急速な改革の無理がたたたり、政治が混乱。彼の死後、悪政をしたとして、像や名前が破壊され、王名表からも名前を消される。ラモーゼはこの時代のテーベ市長

エジプト史上最高の美女。アイの娘という説もある。初期の頃のネフェルティティは壁画に王より多く登場するなど、権勢を誇っていた。有名な彫像は20世紀はじめドイツ人により発掘され、余りの美しさに隠してドイツに持ち帰り、現在ベルリン博物館に収蔵されている。

ツタンカーメンとのむつまじい彫像が沢山残っている。ツタンカーメンがアテン神信仰を放棄すると同時に自身も改名。アンケセネパアテンからアンケセナーメンとなる。しかし、父アクエンアテンが熱心に信仰していたアテン神信仰も捨てられなかったようで、こっそり信仰していた様子が遺物に残る。有名な玉座にもアテン神のレリーフが入っている。ツタンカーメンの死後、アイと結婚するのを嫌がってか、宿敵ヒッタイトに「王子を一人ください。結婚して即位させます。召使とは結婚したくない。恐ろしい」という手紙を送っていた記録がある。



トトメス2世の第一王妃。息子のトトメス3世の摂政という地位にあきらず、自らファラオとして即位。女性ならではの平和外交を展開。でも実際にはヒクソスを数回にわたり攻撃。でもやっぱり戦争は嫌いだったらしく、遠征は息子にやらせている。素晴らしい葬祭殿が有名。プントから珍しい動物を交易で手に入れる図がある。女王自ら交易のための訪問も！



トトメス3世が死ぬとアジアの各都市で反乱が起きる。怒ったアメンホテプ2世は残酷な報復にでた。シリア北部を平定後、王子7人を撲殺。その遺体を神殿に吊るしたとか・・・

カルナック神殿の第8塔門の裏に敵を打ち据えるレリーフがある。王家の谷で発見された墓には本人のミイラが入った石棺が残されていた。



先王が築いた財でぜいたく三昧。ハゲでデブ、歯抜けの不細工王だったとか・・・。葬祭殿を作るが、後世に葬祭殿自体は取り壊され、現在残るのはメンノンの巨像のみ。スカラベに自分のことを自慢した文を彫刻した「スカラベ新聞」を作り、諸国に配る。平民出身のティイを王妃にし、寵愛した。



謎の王。2年間アクエンアテンと共同統治したことが書かれた碑文が見つかるが、それ以外の記録がない。アメンホテプ3世とティイの子という説など諸説ある。すごいのはネフェルティティ自身なのではないかとの説も。公式のネフェルティティの記録がなくなったのと入れ替わりにスメンカウラーが登場するし、女性名で書かれることもあるので、かなり有力な説。

アクエンアテンの代で混乱してしまっていたエジプトを立て直すために、宰相アイと軍司令官ホルエムヘブに支えられ、即位。アクエンアテンによって否定されたアメン神の復権、アマルナからメンフィスへ都を戻す。ハワードカーターが彼の未盗掘の墓を発見。中には生活用品全てが納められ、整理に10年かかった。財宝は現在カイロ博物館に収められている。棺の上には矢車草の花束が置かれていた。ツタンカーメンの死を悼んだアンケセナーメンによって置かれたと考えられている。9歳で即位、17歳で死亡という短い治世だった。早すぎる死から暗殺説がある。アテン神信仰のからみで後世王名表から名前を消され、盗掘を免れた。



ツタンカーメンの体に香油を塗るアンケセナーメン

子供がいなかったツタンカーメンの死後、王位継承権を持つアンケセナーメンと結婚。ファラオとして即位する。アクエンアテンの時代からの幸手で、アテン神信仰にも熱心に付き合っていたのに、王が死ぬとあっさり信仰を捨て、アメン神信仰にもどり、地位を保つ。ツタンカーメンの死によって最も得をした人で、暗殺の犯人ではと疑われている。西の谷には墓が残るが、ひどく破壊されていて、肖像や名前もほとんど削り取られている。彼の死後ネフェルティティの妹と結婚したホルエムヘブがファラオとなるが、彼はアテン神信仰の記録を抹消。アクエンアテンからアイまでの王の治世を全て自分の治世として記録した。



エジプト19~20王朝

もともとエジプトでは長女が王位継承権を持っていたが、この頃になると男子が継承権を持つようになる。
セティー一世は次々に大掛かりな建築物を建造。カルナック神殿の大列柱室は134もの柱がそびえる。アピドスにも葬祭殿を建築。大変美しい壁画が有名。



ラムセス2世の第一王妃。大変愛され、女性でエジプト史上ただ一人神殿を建ててもらう。墓はエジプトで一番美しいといわれる。現在は閉鎖中。



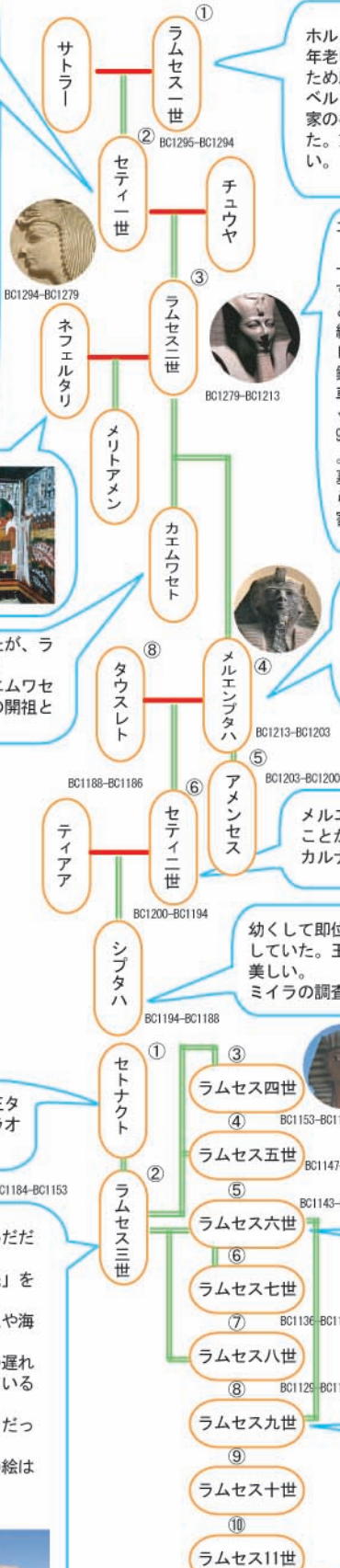
ラムセス2世に次の王に指名されていたが、ラムセスが長生きしすぎて先に死亡(´-`)。各地にある先王の建造物を修復。「カエムワセト修復せり」との碑文が残る。考古学の開祖といわれる。

ラムセス2世に次の王に指名されていたが、ラムセスが長生きしすぎて先に死亡(´-`)。各地にある先王の建造物を修復。「カエムワセト修復せり」との碑文が残る。考古学の開祖といわれる。

ここから20王朝

どうい経緯で王になったか不明。先王タウスレトの時の大臣バイを追放しファラオになったという記録がある。

ラムセスという名前は偉大な先王にちなんだだけで、血縁関係などはない。ヒッタイトを滅ぼして勢いを持つ「海の民」を撃破。国土を守った。メディネトハブに葬祭殿を建築。リビア人や海の民との戦いが延々と記録されている。晩年、デルエルメディナの墓職人が給料の遅れを理由に歴史上初のストライキを起こしている。王家の谷にある墓は古代から開かれ、有名だった。墓に描かれている「盲目のハーブ弾き」の絵は「値千金」と評価されている



ホルエムヘブの盟友。年老いてから即位したため即位後2年で死亡。ベルツォーニにより王家の谷で墓が発見された。玄室の壁画が美しい。



エジプト史上最大の建築王。アブシンベル神殿・ラムセウム・アメンホテプ3世が作ったルクソール神殿の拡張など、各地に巨大な建造物を残す。シリア方面で勢力を増していたヒッタイトとカディッシュで戦い、世界最初の平和条約を結ぶ。ヒッタイト、エジプト双方で、「圧勝」との記録があるが、実際は引き分け(笑)その時の戦車で戦う勇壮なラムセス2世のレリーフがカルナック神殿に残っている。92歳まで生き、100人の子供がいたといわれる。1995年王家の谷の調査で95室もの部屋を持つ墓が見つかった。ラムセス2世の王子の墓と考えられている。自身の墓も王家の谷にあるが、水害で破壊しており見学できない。



ラムセス2世の死後60代で即位。治世中に、シリアの反乱を鎮めたり、平和条約に基づき、ヒッタイトを援助したことなどが碑文に残っている。王家の谷の墓は古くから知られ、ギリシャ語やラテン語の落書きが残っている。



メルエンптаハに次王に指名されていたが、なぜかアメンセセスが即位。その後、やっと即位することができた。カルナックに神殿が残っている。王家の谷に墓があるが、壁画は通路の入り口に残るのみ。

幼くして即位したので、義母のタウスレトと大臣バイが実質的に支配していた。王家の谷に墓がある。玄室に壁画がないが、通路の壁画は美しい。ミイラの調査から、小児マヒで足を患っていたと考えられている。



建築用の石を手に入れるためにシナイ半島に遠征を行った。墓は古代から開いていて、家畜小屋に使われていた形跡がある。シャンボリオも王家の谷調査中この墓をホテルがわりにしていたらしい。詳しい記録なし。



彼の時代、もはやエジプトの威光は衰退し、国土も縮小していた。墓はラムセス5世のものを拡張したもの。王家の谷の中で壁画の美しさから大変人気のある墓。ミイラは斧でずたずたにされていた。ただの泥棒にしてはひどすぎるので、恨みによるものではないかといわれている。



この時代になると神官が力を持ち、政治システムがぐちゃぐちゃ。王も首都テーベではなくデルタ地域に入り浸っていた。カルナックのアメン神殿には王と同じ大きさで神官が描かれ、王権の失墜が良く分かる。賄賂が横行し、エジプトは衰退の一途をたどる。



神官の力がますます増し、王権は完全に失墜。晩年は神官が大神官に任命した軍人あがりのヘリホルが自分の治世年を数えだす。(王になったと宣言したようなもの) 11世で20王朝は終わり。この後しばらく上下エジプトの分裂状態が続くことになる。